

# 文章内における言い換えについて

— 接続語句による言い換えを中心に —

蒲 谷 宏

本稿は、文章内における「言い換え」について考察したものである。文章内における言い換えというのは、表現主体がAという表現を、その直後、同素材を示すBという表現に換えるという言語事実で、A、Bに相当する表現単位には、語・句・文・文段がある。

文章内における言い換えは、形式的には、AとBとの間に「言い換えれば／すなわち」などの接続語句が位置するものと、そうでないものとに分類することができる。さらにそれらの中間に、「A—B—/A(B)」などで表される場合があるが、これらも含めて、言い換えを接続語句で表示しないものについては、接続語句が用いられた言い換えに準じて扱えるかと判断した。そこで本稿においては、前者の「A接続語句B」で示される言い換えについての考察を中心に進めていくことにしたい。

なお、「A接続語句B」は、「A言い換えるとB/A換言すればB/A別の言い方をすればB」などと、「AすなわちB/Aつま

りB/A要するにB」などとに分けて考えられる。前者をまとめて、「A換言スレバB」という形で示すことにし、その形式で表されるAとBとの関係について考察した後、後者との関連について検討していきたいと思う。さらに他の形式も含め、文章内における言い換えについて、その表現意識などを考えていくことにする。

## 二・一

まず「A換言スレバB」における、AとBの素材に対する視点及び表現の関係について考察していきたい。

基本的に、表現主体の立場からすれば、自己の表現したいものを表現することは当然なのだが、そこに場面である理解者（主体である理解主体と区別する）に対する考慮が働くことも事実である。つまり、表現主体の視点に基づく表現だけではなく、理解者の立場に立って表現する必要も生じてくるのである。

Aにおける抽象的・専門的・個人的な表現—つまり表現主体の視点で素材を捉えた表現—を、Bにおいてはより具体的・一般的な

表現→つまり理解者を考慮した表現→に言い換えるという形が、「A換言スレバB」の基本的パターンであるのも、そのような理由に基づくものである。

① きょう公表された昭和五十八年「警察白書」の焦点は、犯罪の質的变化と警察の対応、言い換えると新しいコンピュータ犯罪との戦いだ。(『よみうり寸評』『読売新聞』)

② どの言語も、このようなミクロ的な整合性(言いかえれば、「文」と「文」との関係、あるいは、「文」の境界を超えて妥当する関係)を表示する手段は多かれ少なかれ持っているはずである。(池上嘉彦『記号論への招待』)

③ ここで言う紐帯とは、それによって「現実」が「言葉の世界」に嵌入するという意味である。換言すれば、「現実」が「言葉」の一部になる、ということである。(森有正『経験と思想』)

表現主体の立場からは、「A||自己の視点に基づく表現→B||理解者を考慮した表現」、理解主体の立場からは、「A||難解な表現→B||平易な表現」である。この順序が「A換言スレバB」の自然な流れではあるのだが、実際には必ずしもこの通りでなくともよいようである。右の例のA、Bの順序を逆にしても成り立つ(後に述べるように表現意図が変わるが)ことや、

④ …彼女は、私がいま彼女を中心に形作られている生きた人間関係の世界でヨソ者の立場をとっている、いいかえれば uncommitted だ、というのです。(高橋徹「海外留学の二つの型」「私の外国語」)

⑤ それを明らかにするために、言い換えれば一つの(命題の体

系)の中に映し出すために、出来るだけの時間を捧げなければならぬと感じたのである。(『経験と思想』)  
などの例、あるいは、

⑥ 「よそもの」であるという意識→それはむずかしくいえば「疎外」ということだ。(加藤秀俊『日本人の周辺』)

のように、Bで「むずかしく」言い換える例(Aわかりやすく言えばB)などと反対の形式)もあることなどからも、そのことがいえる。

ただし、表現意図の点からみると、A Bに入る内容→素材に対する視点のあり方の順序により、表現全体の性格が変わるようである。つまり、(1)「A||表現主体の視点に基づく表現→B||理解者を考慮した表現」では、平易な説明、解説に重点がおかれ、(2)その逆の順序となる、一般的、具体的な表現(A)を、表現主体の視点による表現Bに言い換える形式では、(B)に重点がおかれるということである。

いずれにしても、これらの型は基本的に理解者考慮といえるのだが、(1)において、その意識がより強くなっているといえるのではないだろうか。

## 二・二

以上述べてきた、A、Bの関係に対して、素材重視型ともいべきものがあげられる。これは、素材に対するA、Bの視点がいずれもその素材の全貌をできるだけ明確にするためにとられたもので、結果的にはA、B両表現により理解者の理解度を高めるこ

とになるが、直接A、Bが理解者を考慮した表現とはなっていない。つまり、A Bの表現が難易の関係ではないということである。

⑦ 大人のことばに較べると、幼児のことばは統辞に関してのコードによる支えが少ないから、どうしてもコンテクストへの依存度が高い。言いかえれば、メッセージのコンテクストからの自立性が低いわけである。(『記号論への招待』)

⑧ その結果アメリカの精神科医は概して、患者がどうにもならずにがいている状態に対して恐しく鈍感であると思うようになっていた。いいかえれば、彼らは患者の隠れに甘えを容易に感知しないのである。(土居健郎『甘え』の構造)

これらの例は、素材自体が異なる視点を同時に要求しているということもできる。

実際にはこのような「A換言スレバB」の用例も多く、その場合にはこの言い換えは、A、B二つの表現(あるいはそれ以上の表現)で一つの素材を明らかにしていく、つまりいくつかの異なった角度からの視点で素材の輪郭を浮かび上がらせる、一種の表現技術といえよう。

BがAの説明になっている場合は、その表現意図を満たすためには、A Bの順序を変えられないが、基本的にA、Bは補足の関係にあるため互換性がある。したがって「A換言スレバB」全体にいえることだが、この表現形式では二つの異なった視点を表すということに重点があるため、A Bの順序を固定的には考えられない。

また、A、Bの素材に対する視点が極めて近い場合には「A換言スレバB」の形で表現する意味が薄れる。そのため、文体的

差異、方言的差異などによる同義・類義語がこの形で示されることは稀である。

### 三・一

次に「AすなわちB/AつまりB」などの接続語句(いわゆる副詞なども含む)による言い換えについて検討していきたい。(以下この形を「A接B」で示す。)

基本的には、「A換言スレバB」も「A接B」も同一素材に対する異なった視点に基づく表現ということでその関係は深く、またそれぞれの接続語句は互換性が高い。「換言スレバ」の代りに「すなわち」や「つまり」を用いることができる場合も多いのである。しかし厳密には、それらの語句の間には意味・用法上の微妙な差異がある。

森田良行先生の『基礎日本語』1・2では「いわば/すなわち/たとえば/つまり/要するに」などの語句について詳しい分析がなされているが、ここではそれらの中、言い換えに関する語句について、表現主体の素材に対する視点の違いという点から考察していくことにする。

「A換言スレバ/いわば/すなわち/たとえば/つまり/要するにB」におけるA、Bの素材に対する視点の違い、関係を、それぞれの特徴を示すために図で表すと図Iのようになる。

「換言スレバ」は先にも述べたように、二つの異なった視点を表すという点に特徴がある。そのため基本的には、他の語句をすべて「換言スレバ」に置き換えることができるのである。しか

図 I

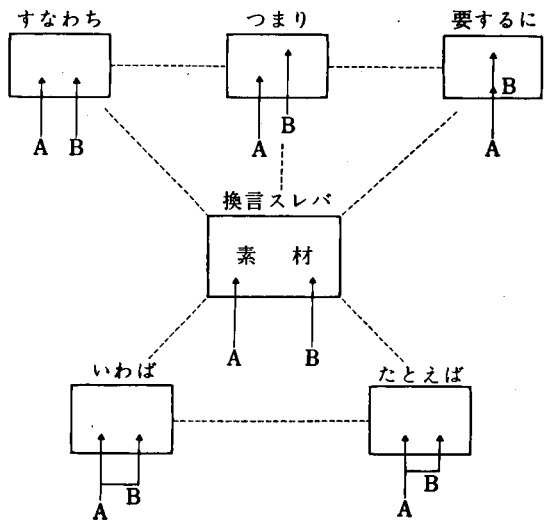


図 III

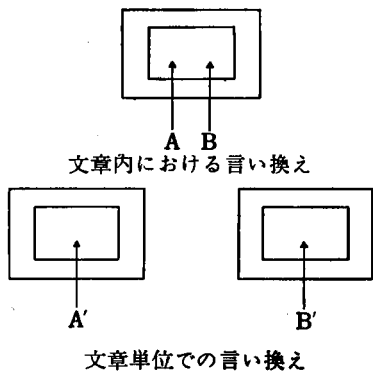
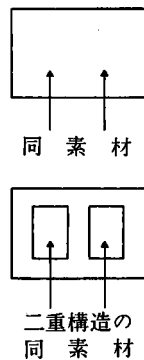


図 II



し、その素材に対する視点の異なり方によって、A Bの関係を示す語句も変わってくる。

もちろんこれは、それぞれの語句の特徴と相互の関係を把握するための図式的な説明であるため、次に用例を示しながら考えていくことにする。

「換言スレバ」は、二つの視点が近づくにつれて、その表現の価値が減じてくる。異なった角度からの視点でないと、「言い換える」意味がないからである。

⑨ もっと逃げ場のない打撃を、言いかえればもっと逃げ場のない安堵を私も心待ちにしていたことになる。(三島由紀夫『仮面の告白』)

⑩ もし入試に出ないのだったら、こんなものを骨折って暗記するのは、よほど感心な一言い換えればおめでたい学生にちがいない。(小西基一『古文研究法』)

右の例などは、他の語句では置き換えにくいと考えられる。それに対して「すなわち」は、AとBとの素材に対する視点が近いものに用いられる場合が多い。

⑪ エロス<sup>①</sup>は欠乏の自覚のゆえに、善きもの、美しきものを愛し、その永久の所有、すなわち不死にあずかるために：(三島由紀夫『芸術にエロスは必要か』)

⑫ 後者は発音運動、すなわち言語発音を発生する運動、いいかえれば、音声器官の社会習慣的型にはまった運動の研究である。

(服部四郎『音声学』)

⑬ は、「すなわち」と「いいかえれば」の違いを示した例であ

る。もちろんこの例の「すなわち」と「いいかえれば」を置き換えても成り立たないわけではないが、あまり適当な表現にならないのではないか。

「つまり」は、それに対してA Bが異なった視点というだけでなく、同一視点の焦点を絞っていくという表現になる。説明、結論の意識が働くのも、そのためであると考えられる。

「つまり」と「換言スレバ」は互換性があるが、「つまり」が「すなわち」に近づいた場合、それが薄れる。

⑬ 昭和十九年—つまり終戦の前の年—の九月に、…(『仮面の告白』)

この例などは「すなわち」が用いられてもよいところである。

また、AはつまりBということである、というはつきりした説明の場合も、「換言スレバ」に置き換えにくい。

⑭ また稚児は「別火」である。つまり、家族と別の火で、煮たきしたものを、食べさせられる。浄めである。(川端康成『古都』) なお、ここでは接続語句が用いられていないが、「…食べさせられる」と「浄めである」との間には、同じく説明といっても「つまり」の視点とは異なるため、「いわば」などが入るのが適当であらう。

「要するに」は「つまり」と類似した視点になる。しかし「要するに」はまとめ意識が強いため、A B視点が極めて近いときの「すなわち」との互換性は低い。

また、「換言スレバ」で置き換えることはできるが、まとめ意識、抽象意識が強く打ち出される場合には、置き換えにくくな

る。単なる言い換えではなくなるからである。

⑮ 日本と西洋の宴会のスタイルのちがいは、要するに「文化」のちがいというものだ。(『日本人の周辺』)

「いわば」は、比喩的に用いられる場合、「換言スレバ」に置き換えられるが、次のような例ではそれができない。

⑯ また、北山杉は、いわば栽培されたもので、自然の大木が好きたと言ったためか。(『古都』)

「たとえば」は、Aの視点を保ちながら具体的な例をあげるために、別の方向へいこうとするBである場合、「換言スレバ」に置き換えられる。

⑰ …何か不吉な兆、たとえば数分後に突然の空襲があつて私たちが立ちどころに爆死すると謂つた不吉の兆でなければならぬような気がした。(『仮面の告白』)

ただし、Aに語句単位での表現が入る例は少なく、Aにおいて文・文段で表現してきたものを、Bにおいて文単位で説明するといった場合が多いようである。

以上、「換言スレバ」と他の接続語句との表材に対する視点の違いを中心とみてきたが、先に述べた「換言スレバ」の分類と関連づけると、「いわば」「たとえば」などは理解者考慮型、そして大体において、「すなわち」「つまり」「要するに」は素材重視型に近くなるといえる。

三・二

次の表は、これらの言い換えに関する接続語句が実際の文章中

どの程度用いられるか、その傾向をみるために示したものである。使用した資料は次のとおりである。(以下それぞれを番号で示す。)

- ① 夏目漱石『それから』(漱石全集第八卷)
- ② 志賀直哉『和解』(新潮文庫)
- ③ 太宰 治『人間失格』(同右)
- ④ 三島由紀夫『仮面の告白』(同右)
- ⑤ 川端康成『古都』(同右)
- ⑥ 清水幾太郎『論文の書き方』(岩波新書)
- ⑦ 土居健郎『甘え』の構造
- ⑧ 加藤秀俊『日本人の周辺』(講談社現代新書)

「A換言スレバB」「A接B」が頻出する文章は、やはり、特に理解者を考慮して素材を表現する説明型の文章、すなわち論説文、解説文である。ただし、小説の中でも、文章中多視点からの説明を要する素材があれば、この形式が用いられることも明らかである。

計	接続語句						作品番号
	換言スレバ	いわば	たとえば	すなわち	つまり	要するに	
8	3	4	0	0	0	1	①
1	0	0	0	0	0	1	②
23	0	19	1	1	2	0	③
28	0	14	1	3	7	3	④
7	0	4	0	2	1	0	⑤
99	6	25	38	13	3	14	⑥
156	15	1	68	29	8	35	⑦
68	42	4	9	8	2	3	⑧

次に、右の表から、それぞれの語句と文章との関わりについて考えていきたい。

まず「換言スレバ」であるが、これは⑥、⑦に多い。先に述べたように「換言スレバ」は、同素材に対する異なった視点を表現するところに特徴があるのだが、逆にいえば、表現主体独自の視点が前面に押し出されていないということである。もちろん、それには理由があり、一つには理解者に対する考慮、また一つには素材からの要求である。そして、この理由が、表現主体の独特な視点に基づく表現を重視する小説などの文章にも、ある部分あてはまることは右に述べたとおりである。

しかし、理解者に対する考慮が優先されてわかりやすい表現を加え、さらに独自の視点からだけでなく多くの角度から複雑な素材を表現しようとする、そのような表現意識が働いている文章が、つまり表現主体の視点だけが強調されない文章が、すなわち論説文や解説文になるわけである。

したがってその観点からすると、⑧は比較的、表現主体の視点が強調されている文章であるといえるかもしれない。

ただし、「換言スレバ」が多用されているからといって、⑥や⑦が、特に⑦がやさしい文章だということにはならない。なぜなら、その文章には、言い換えなければならない素材がそれだけ多いということになるからである。

論説文や解説文が、理解主体の立場ではむしろ難しい文章であるという理由の一端もそこにあるのではないか。「換言スレバ」がまったく用いられない文章と、多用される文章は、その難しさ

の違いはあっても—前者は、表現主体の個性的な視点だけが与えられる難解さ、後者は素材自体のもつ難解さ—同様に難解な文章といわなければならない。

次に「いわば」であるが、この表からだけでは特に文章間の相違は見出せない。そこで、概念的、抽象的なものから具体的なものへと言い換えていくという点では同様の「たとえば」をみると、文章間の相違は顕著である。

具体例を示すということは、その素材が抽象的であることを意味し、「たとえば」が具体的な事実を描写している文章に用いられないことは明らかである。その意味では、小説か論説文かといった分類とは直接関わりをもたない。しかし、「たとえば」には、その素材に対する説明意識が含まれるので、その点では「換言スレバ」で述べたことと同様になる。

なお、一般的な表現で示そうとする「いわば」は「たとえば」と異なり、抽象、具体の関係ではなくなる。

次は「すなわち」であるが、これも文章間の相違が甚しい。その基本的な理由は、「換言スレバ」で述べたことと同様になる。「つまり」は「すなわち」と近い面をもつ一方、「要するに」に近い面もある。⑥で「つまり」が多く、⑦では少ない理由の一つはそこにあると考えられる。互換性があるためである。同様のことが、③、④で比較的多くなっている「つまり」にもいえるのである。

接続語句は、文と文などのつながりを明確にする反面、表現の自然な流れを阻害する性格も併せもつ点から、文学的表現では、

特に「換言スレバ」「要するに」などの語句は用いられないようである。

なお、④と同じく三島の「私批評」ともいうべき『太陽と鉄』では、「すなわち」「つまり」「三例となっている。これは、「すなわち」「つまり」の互換性と同時に、表現主体である著者の文章全体の流れに対する意識、文体論的問題と関わってくるかもしれない。「すなわち」が用いられる文章の方が、より生硬な緊迫した印象を与えられることなど。

次は「要するに」であるが、⑥、⑦と⑧との数値が、「換言スレバ」「すなわち」の場合とは逆になっている。これは、言い換え意識とまとめ意識との違いである。つまり、⑦では「甘え」という概念を説明していく―その素材をいくつかの異なった視点から説明していくのに対して、⑧では、日常の様々な日本人的行動を一般的に概念化させる―具体的事実を述べそれをまとめていくという違いである。

なお、①の「要するに」の中、二例は会話中（平岡のことば）のものであり、地の文例は一例のみである。

以上、それぞれの語句についてみてきたが、この外の接続語句の用いられ方と文章との関係（「しかし」型の文章など）と同様に、文章の性格と関連してくると思われる。

#### 四

これまで「A換言スレバB」「A接B」について考察してきたが、この外にも他の接続語句を用いる言い換えとして、「わかり

やすく言うと」「別の視点から見ると」「簡単に言えば」「陳腐な言い方をすれば」「術語的な言い方をすれば」「一般化して言えば」などがある。これらはAとBとの関係、つまり言い換え方そのものを表現した語句であり、「換言スレバ」を具体化させたものであるともいえよう。しかし逆に、言語表現としての抽象度からみると、言い換えに関する接続語句の中で最も低くなるため（A接B、「A換言スレバB」、これらの表現、の順になる）、様々な変種ができる可能性が高い。

次に、AとBの言い換え関係を、接続語句を用いず示す場合について考えていきたい。

このような例は多く、

⑬ 以上は、私が読む人間から書く人間へ変化して行った過程である。私の精神が読む働きから書く働きへ移って行ったコースである。（清水幾太郎『論文の書き方』）

などのように類似表現をくり返す場合や、

⑭ しかも、同時に、自分の精神の奥へ深く入って行くことが出来る。対象と精神とがそれぞれの深いところで触れ合う。書くことを通して、私たちは本当に読むことができる。表現があつて初めて本当の理解がある。（『論文の書き方』）

この例のように、異なった視点に基づく表現の中「つまり」で示しうる場合もある。また、

⑮ 兎に角イブセンは求める人であります。現代人であります。新しい人であります。（森岡外『青年』）

のように、演説でのくり返し表現などの例もある。



このような「A・B」とでもいへば表現は、接続語句が省略されたものとみることはできないだろう。本来、接続語句は、AとBとの関係を明確にするために顕在化させたものであると考えられるからである。先にも述べたように、文章の流れを重視する際は、むしろ接続語句を用いない方が良い場合も多い。

ただし、冒頭に述べておいたように、このような「A・B」という言い換えも、A・Bの関係や、表現主体の視点などについては、これまで述べてきた接続語句を用いた言い換えに準じて、考えることができると思う。

## 五

最後に、文章内における言い換えについて、その特色をまとめていきたい。

まず、表現単位の点では、A・Bともに、語、句、文、文段のすべてが可能で、それぞれの組み合わせによって成立する。語と語、語と句、句と句の場合は、文章内であると同時に文中での言い換えになる。

表現上の特色は、同素材に対する異なった視点に基づく表現であるという点にある。ただし、これは、ある事物について表現した文章では、その文章を構成する語、句、文、文段のすべてが、その事物を説明するための言い換えではないか、という考え方を生じさせる。例えば「早稲田大学」や「自由」について表現した文章は、すべてがその文章の素材である「早稲田大学」「自由」というものについての言い換えになる、という考え方である。

たしかに一つの素材（主体が捉えた事物としての素材）に対する異なった角度による表現ということが出来るが、それはこれまで述べてきた文章内における言い換えとは異なる。その違いは、図IIのように示すことができる。考える。

客観的には同素材であっても、表現主体の視点では、二重構造の異素材に移行しているというのである。

次の例は、一見言い換えにもとれるが、素材自体が表現主体の意識の中では変化していると思われる。

② 呼んだのは、初め道入ったとき瀬戸が話をしてゐた男である。髪を長く伸ばした、色の蒼い男である。（『青年』）

次に、AをBに言い換える理由、目的について、これまで述べたことを次の二種にまとめることができる。

1 A だけでは、理解者が理解できない。（または、理解しにくい。）

2 A だけでは、この素材を表現できない。（または、表現しにくい。）

逆にいえば、次のようになる。

1' B があれば、理解者が理解できる。（理解しやすくなる。）

2' B があれば、この素材を表現できる。（表現しやすくなる。）

2・2'においては、（だから理解しやすくなる）ということが、間接的に意識されている。

なお右にあげたことは、あくまで表現主体の意識に基づくことであり、理解主体の立場では、A だけでも理解できる場合や、B があっても理解できない場合が起こりうる。また、表現主体が 1

・2のように判断しない場合や、判断してもBを表現しない場合には、言い換えがなされないわけである。

このような意識が、AをBに言い換える理由であるが、混同してはならない理由として、

1 Aでは理解者が理解できない。

2 Aではこの素材を表現できないが、あげられる。

この理由では、Aという表現自体が、不都合な表現として変えられることになってしまう。文章内における言い換えでは、AとBという二つの表現が、同時に必要なのである。むしろAの方がより必要な場合が多い。Aが、表現主体の視点に基づく表現であることが多いからである。

ただし、結果としての表現は継時的なものでしか成立しえないが、素材に対する二つの視点をとる段階では同時に成立しうるため、A、Bの順序は表現意図によって変わるわけで、固定的なものではない。

A、Bの関係については、すでに述べてきたとおりである。

以上述べてきた文章内における言い換えると、文章単位での言い換えとの違いはどこにあるか、その点について最後に触れておきたい。

文章単位での言い換えにおいては、独立した文章であるAを、B'という別の独立した文章に換えるため、A'とB'における、表現主体と場面が異なる。その点が、文章内における言い換えとの基本的な違いである。(ただし、文章内における言い換えにおいて

も、引用した文などを言い換える場合には、表現主体が異なる。また、文章単位での言い換えでも、客観的な人物としては、A'とB'の表現主体が異なる場合も多い。)

また、同じく表現単位としては語、句、文、文段の言い換えであっても、文章単位での言い換えにおいては、それぞれがA、B'としての場面的制約をうけるため、それだけを取り出して検討することはできない。

さらに、文章単位での言い換えにおいては、先に混同してはならないとした、A'という文章を構成する語、句、文、文段が、B'という文章では理解されない、また適当でない、といった理由も成り立つのである。文章内における言い換えると、文章単位での言い換えとの違いは、図Ⅲのように示せる。

以上、文章内における言い換えについて考察してきたが、これは、文章論としての展開や接続語句の問題と関係が深い。また、文章単位での言い換えとの関連なども含め、今後の課題にしたいと考えている。

注(1) 市川孝氏に倣い、接続詞及びそれと同様な機能をもつ語句の総称を「接続語句」とよぶことにする。

(2) 他の接続詞を含めた調査として、京極興一、松井栄一氏「接続詞の変遷」(『品詞別日本文法講座 接続詞・感動詞』)がある。

(3) 市川孝氏の調査によると、言い換えに関する接続語句は省略されやすい傾向があるようである。(『文章論概説』「接続語句の省略」)